

「古き良きタイ」、いまむかし -- タイ・アムパワ ー郡水上マーケットを訪ねて（フォトエッセイ）

著者	青木 まき
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	207
ページ	32-35
発行年	2012-12
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003813

「古き良きタイ」、いまむかし —タイ・アムパワー郡水上マーケットを訪ねて—

写真・文 青木 まき
Maki Aoki



「アムパワー」と書いたおそろいの傘をさしている物売の船

水上マーケットと言えば、もっぱら外国人観光客が「古き良きタイ」のエキゾチックな風情を求めて訪れる場所だと思っていた。それが近年はタイ人の、とりわけバンコクの人々の間で人気なのだという。何がそんなにバンコクの人の心に訴えるのだろうと関心を寄せていたところ、親切なタイ人の友人が車を出して水上マーケットへ連れて行ってくれることになった。二〇〇九年の夏のことである。

「水上マーケットを見るならここだー」という友人らの推挙により、私の目的地はサムットソンクラーム県のアムパワー郡に決まった。バンコク近郊の水上マーケットとしては、ラーチャブリー県にあるダムヌーン・サドゥワックも有名である。だが友人たちによると、ダムヌーン・サドゥワックは「混んでいる上にまるつきり外人向け」で宜しからず、ということで「古き正しき」水上マーケットとしてアムパワーが選ばれたらしかった。

アムパワーは、メークローン川からひいた運河の畔にあり、一七世紀頃から近隣の通商拠点として繁栄した。一九世紀の国王ラーマ二世の生誕地であり、現在も王室に縁の深い土地として、昔から王室を敬うタイ国民が足を運ぶ観光地でもあった。しかしそんな土地も、二〇世紀に入り陸上交通が盛んになると、他の多くの水運の街とともに衰退した。寂れた街に往年の賑わいを取り戻す契機となったのが、二〇〇三年に



近郊のリゾート会社が贈った「2008年ユネスコアジア・太平洋遺産賞受賞」を祝う横断幕

始まった「アムパワー運河コミュニティ保全事業」である。二〇〇四年にユネスコの支援を受けて本格化したこの事業では、中央官庁、地元自治体、国立チュラロンコーン大学建築学部の教授らが協力し、歴史的建築物の保存とそれを支える地元コミュニティの振興を目指した。事業では建築技術自体が文化的遺産であるという理解に基づき、まず専門家が家々の内装と建築技術を調査して資料集を編纂した。また建物の修復に際しては、デンマーク開発支援計画が費用の半額を負担し、一人でも多くの所有者が低コストで保存事業に参加できるよう努めた。同時に、地元自治体の職員や住民が自分たちの土地の歴史や風土に対する理解を深め、地元への愛着を持てるようにと、芸術家や建築家らがワークショップを行った。我々の目指す水上マーケットも実は、二〇〇四年にこの事業の一環として地元郡庁と住民が再開したものだと言う。こうした努力の結果、アムパワーは「古き良き」街並みを取り戻し、二〇〇八年にはユネスコの「アジア太平洋遺産賞」を受賞している。近年、文化財保護事業は文化財を観光資源として地元共同体の振興に結びつける形で行われる傾向にあるが、アムパワーはタイにおけるそうした文化遺産観光開発の先進的事例となっている。つまりバンコクの友人たちという「古き良きタイ」の風情もまた、こうした事業によって新たに創出されたものなのだった。

アムパワーには真昼に到着した。水上マーケットは夕方から立つというので、私たちはしばらく街の周辺を歩くことにした。昼間のアムパワーは外国人である私の目にも「鄙びた」「ゆかしい」といった表現が似つかわしく思われるような、静かで素朴な土地だった。辺りにはココ椰子やランブータンといった果樹の畑が広がり、その間を運河が流れている。強烈な日差しが水面を照りつ



運河の様子



お寺参りに行くのも小舟に乗って



おしゃべりと美味しいものが大好きなタイの人たちにとって、気の置けない人たちと川風に吹かれながらつまむ果物は、ことさら美味しく感じられたことだろう。アムパワーは、友人の心象風景のなかでそうした家族の思い出と共にあるようだった。そんなのどかな情景は、夕方になって一変した。日が傾くと、運河に面した路地も橋も人で埋

「子どもの頃、週末は家族でよくここに来たんだ」と連れの友人は教えてくれた。「何度も来れば地元の人とも顔見知りになってね。軒先を借りておしゃべりしたり、みんなで果物を持って小船にのり、近所のお寺にお参りに行ったりしたものだよ」

けているにもかかわらず、川面を渡って来た風は涼しく柔らかい。風は水上に架けられた路地を越え、家々の薄暗い間口へ流れ込み、黒光りする板の間を通過して、裏口から明るい中庭へ抜けてゆく。軒先にあるベンチに腰掛けて風に吹かれれば、柱の上で回っている埃だらけの扇風機など忘れてしまふ心地よさである。



小舟で売りに来る「舟そば」は、アムパワーの名物

まった。それまでのんびりと間口を開いていた店先にも「アムパワー」と書いたTシャツやキーホルダー、ホタルの縫いぐるみがところせましと並べられている。いつの間にか運河も屋台や物売りの船で埋め尽くされ、聞きしに勝る賑わいに、同行の友人も「昔はこんなじゃなかったのに」と呆れている。観光客は二〇代くらいの若者が多い。友人の話によれば、彼らのお目当てはホタル見物らしい。水上マーケットが夕方立つと聞いて不思議に思ったが、ホタルの飛ぶ時間に合わせているのだと気づいた。水上マーケットの買い物を楽しんだ後、ほどなくホタルが飛び交う川辺の雰囲気を楽しめるといふ趣向らしい。何というぬかりのない演出！ バンコクからの観光客は、その後たいてい民宿に泊まる。民宿は一泊二〇〇バーツの安宿から、運河沿いの古い建物を利用した一泊数千バーツもする高級なものまで様々だが、一〇〇〇から一五〇〇バーツ位の宿が人気らしい。その経済効果にかんする統計は手元がないが、村興しとしてこれだけ集客できたのなら、ま



観光客をのせて運河を行き交う小舟



静かな日中の街

運河に面した商店の様子



あおき まき／アジア経済研究所 東南アジアI研究グループ

専門はタイ外交 国際関係。

2007-2009年にタイ、タマサート大学政治学部にて客員研究員として赴任。

ずは成功の部類に入るだろう。

この文章を書くに当たり改めて専門家に尋ねたところ、興味深い話を聞いた。コミュニティ保全事業として再興したアムパワーだが、そこで商売をする売り手のなかに、年々バンコクの人が増えてきているという。地元の人から場所を買い受け、週末を利用してバンコクから出てきては、屋台やカフェを開く人もいられるらしい。また最近では、川沿いの土地を買い取り、以前からある建物を壊して別荘を建てる富裕層も現れて問題になっているという。アムパワー保全事業は「古き良きタイ」に対するバンコクの人の欲望を的確に捉え、商品化することに成功した。一方で、「保全」の対象だった地元コミュニティは当初の想定を越えて変容し続け、それにもなっている。「古き良きタイ」の風情や景観も、友人のいったような親密な感情をともしなう実体験や、地元の人々の郷土愛によって守られるべき文化遺産から、バンコクの人によるバンコクの人のための観光商品に変わりつつあるようだった。

あまりの出入に閉口し、我々は裏の路地を通って早々に退散することにした。運河から離れた路地では、昼間ののどかさそのまま夕間に包まれてあった。涼しい風に吹かれながら、どこからかやってくる風鈴の音を聞いていると、自分はアムパワーの街にいたのではなく、今はもうない練馬の祖父の古い庭で夏休みを過ごしているような気がしてきた。友人にそういったところ、彼は「バンコクの人みたいなことをいうなあ」と笑った。私もまた、失われた「古き良き」何かを求めて押し寄せる都会人のひとりということか。なんともはや。